

<資 料>

増田実と作文集『野火』について

筑西市立下館南中学校

教 諭

小 倉 祐 一

本稿は、茨城県常総地方（県西地域の旧結城郡・旧真壁郡）に於いて「生活綴り方教育」の実践家であった増田実について、その実践の足跡を紹介するものである。

増田は、綴り方教育において、戦後いち早く児童作文集『野火』を1947（昭和22）年2月に創刊した。1947（昭和22）年は、中央にあつて童話雑誌『赤とんぼ』、児童雑誌『子供の広場』児童詩誌『詩の国』などが企画発行されて、綴り方をとりあげる風潮が出て来たが、地域文集として『野火』の発刊は、全国的にも最も早いころのものであった。また、増田は『野火』の総集編である作文集『明るい子どもたち』を監修している。この作文集『野火』とその総集編である『明るい子どもたち』は、茨城県常総地方における児童文化遺産的な価値がある。

キーワード

生活綴り方教育 Study on the Teaching of Composition 野火 NOBI

1 増田実と『野火』

増田実¹⁾は、昭和初期から生活綴り方教師・作文教師として、その道を切り開き、ひたすらに実践し、県西地域における綴り方・作文教育の礎を築き更に推進した人物であった。

戦後、増田の仕事で特筆すべきことは、いち早く地域で「綴り方・作文教育」の復興に着手したことである。増田は1947（昭和22）年2月、児童綴り方雑誌『野火』を発行した。その後、『野火』は3号から「タブロイド版」教室鑑賞指導用として、低学年『のび』、高学年『野火』に分け発行されている。増田は当時、結城郡作文教育研究会の責任者であり、『野火』の総編集長であったが、『のび』『野火』は1961（昭和36）年12月まで、およそ15年間続くのである。

雑誌『野火』について増田は、常総地方の教育同人誌『SAIDE』²⁾に「『野火』のころ」という小論を載せている。そこに『野火』創刊当時の事情や様子が詳しく述べられている。

水海道市の新々堂書店の一室で当主増田一や北相馬地方事務所学事室の秋葉謙などと雑談の折り、「今の子供達を救うための一策として、子供のための文芸誌でも出してみたら」という話が出たのが、1946（昭和21）年9月のことであった。それから、増田と秋葉が中心になり、筑波郡菅間国民学校の鳩貝藤郎、真壁郡里子国民学校の大島武男等と原案作成にとりかかった。作品募集要項や趣意書等を全県の学校に送付したのは10月になってからであった。誌名は、鳩貝藤郎の提案で『野火』になった。そのように燃えあがる

ことを願ったためである。

『野火』創刊号³⁾を見ると編集同人は次のようであった。

北相馬地方事務所学事室	秋葉 謙
那珂地方事務所学事室	平井 太平
北相馬郡取手国民学校	中村 武男
真壁郡黒子国民学校	大島 武男
筑波郡菅間国民学校	鳩貝 藤郎
那珂郡平磯国民学校	中島 武郎
筑波郡板橋国民学校	豊島勝之助
結城郡大生国民学校 (代表)	増田 実



【写真は『野火』創刊号】

平井・大島・鳩貝の三氏は、増田の戦前の「茨城国語教育研究会」当時の知友であり、中村・豊島は秋葉謙の紹介によったものである。

募集種目は、綴り方・自由詩・俳句・短歌であったが、12月初めまでに応募校数が46、作品は100編を越え相当数の作品が集まった。増田一の第三郎の表紙絵で、32頁の『野火』創刊号が出たのは、1947（昭和22）年2月1日である。定価5円であったが発行部数は不明である。

作文の選は増田が担当した。雑誌『赤い鳥』にまねて優秀作を特選、それに次ものを第一佳作、第二佳作とした。

創刊号の第一佳作は次のようであった。

「ひよこ」	初5	飯島市蔵	菅間校
「先生のお見送り」	初5	古谷礼子	水海道校
「犬とのけんか」	初4	鈴木得夫	石下校
「雹」	初6	古宇田よし	菅間校

最初の予定では月刊として出す予定であったが、作品の集まり、紙の入手、部数等の関係で思う通りにいかず、第2号が出たのは1947（昭和22）年の12月のことであった。

ここでは、作文に北相馬小絹小学校の「忘れ物」という特選作が出た。長塚勝指導の菊地紀美子という6年生の作である。物資不足や、円切替等の混乱の中で、せっかく買って

もらったハーフコートを学校に忘れてしまい、暗くなったのにとりに行かされ、暗やみの教室にしのびこんで手さぐりで捜しあてて家に帰るまでのいきさつを、心情こめて書いた作であった。

結城郡石下、水海道、筑波郡菅間、猿島郡長田校、筑波郡谷田部、真壁郡養蚕、結城郡西豊田、山川中等からすぐれた作品が寄せられた。増田は、これらの作品を読みながら「戦前のある時期に復活した感じで大へん心強く思った」と振り返っている。

自由詩では、那珂郡の平磯・国田、結城郡では、豊加美・五箇・大生・石下・水海道・等から、筑波郡では菅間、猿島では長田・七重、西茨城では笠間、北相馬からは小絹、東文間等から数多くの作が寄せられた。

しかし、雑誌形態の『野火』は、収支が伴わず、第2号で終刊となる。3号からは形態を換えて、タブロイド版にして、そのまま教室でプリントがわりに鑑賞教材として使用できるように、小1・2・3、小4・5・6、中1・2・3の三ブロックに分けて編集した。当初は、一学期中3回位出したが、後、編集の煩雑を緩和す

るため学期1回位の発行となった。学校または学級単位の全員加入が原則で3回分で10円であった。水海道・石下地方（石下町と千代川村）の各学校に呼びかけ多数の学校で採用されたが、この形式になってから遠方の学校の参加が減少してくることになる。

『野火』は、56号まで続き、すぐれた作品を提示する他に、指導者を養成できたという点で大きな意義があった。増田は、『野火』使用の作文指導の研究会を何度か開催して、指導者養成にも当たったのである。

中央では、1947（昭和22）年に、児童童話『赤とんぼ』、児童雑誌『子どもの広場』、児童詩誌『詩の国』『銀河』などが企画発行されて、綴り方をとりあげる風潮が出て来たが『生活綴り方事典年表』によると「各地で地域文集などをはじめた」のは、1948（昭和23）年頃からだということから『野火』発刊などは、最も早いころのものであった。

『山芋』（寒川道夫）『新しい綴り方教室』（国分一太郎）『山びこ学校』（無着成恭）が出たのはその後1951（昭和26）年であった。その意味で『野火』の茨城県常総地方にあって地方の教育文化遺産的な価値は高いものである。

2 作文集『明るい子どもたち』の発行

『野火』は56号まで継続されるが、残念なことに現在それ自体残されているものは少ない。『野火』の中の優良文を集めたものとして作文集『明るい子どもたち』が1959（昭和34）年10月1日に新々堂より定価250円で出版されるが、そのあとがきで増田は次のように発行の経緯について述べている。⁴⁾

『野火』に出た優良文を集めた文集でも出してみても、という話は、増田一君や秋葉謙君からも話が出たわけであるが、これが整理もなかなか容易なことではないし、なかなかふんざりがつかないままに今日に至ってしまった。

私としては、まとめて「記念碑」がわりにしておきたいという個人的欲望もなかったわけでもなし、この後、この道が続いてやってくれる若い人達へ、一応の目安をたてておいて、これを踏み越えてくれるための踏台を作っておくことにも意味がないわけでもないと思っていたので、この度思いきってまとめてみることにした。

この『明るい子どもたち』を記念碑的なものにするという増田の意気込みが感じられる。

『明るい子どもたち』という表題について増田は「『明るい子どもたち』という表題にしたのは、ことさら「貧乏作文」に対抗する意味ではない。『山びこ学校』に代表される、現実認識のし方や、問題に真正面から目をそむけずに立ちむかっていく意欲と、そのとっくみ方のすさまじさには、つとに敬意を払っているところであるが、ここに示されるような、牧歌的とも思われる、こどもの生活の明るさもまた、こどもの生活の一面であると思っている。」⁵⁾と解説しているように、子ども本来が持つ「明るさ」に目が向けられている。増田は続けて「子ども本然に持つ感覚のみずみずしさ、あどけない考え方とらわれない生活の観方と感受性の新鮮さというものは、いつの世でも尊重されていいものだと思うし、それが深く強く、即生活に身につけたものとさせていくことによって、はじめて生活の創造もたしかなものになっていくのではないかと思う。」⁶⁾と述べている。

増田は生活を創造しゆく力こそ、子供の持つ本来の「明るさ」であるとも考えている。このような子供の将来の生活を創造できる「明るい子どもたち」の姿を作文を通して示したかったのであろう。

次に『明るい子どもたち』の内容をみていきたい。全250頁で目次として「明るい子どもたち(1)」「明るい子どもたち(2)」「『ともしび』をみて(日記・手紙・感想文・見学記)」「のら道で(自由詩)」「好きな母」の5項目に分類されている。「明るい子どもたち」を2部形式にしたことについて、「あとがき」で増田が簡単な解説を加えているので紹介したい。⁷⁾

「明るい子どもたち(1)」には、文学的な味わいと童心至上主義的なにおいが多分にあると思う。ほほえましいこどもの生活の明るさである。しかし、(2)になると、よほど趣がちがってくる。(略)ここには「学級」「学校」という集団の中で、いかにお互いは伸び伸ばされ、考えをたしかなものにしていったらいいかという技術が語られ、そしてまた、どうしたら集団生活そのものを高めていくことができるかという、戦前にない新しさ、意欲性と行動性がみられる。また、従来の考え方で容易にこうとする大人達へのきびしい抗議と批判とがある。それらこそが、将来の生活の創造と発展とを約束されるものが深く蔵されている勇敢なたちむかいであるという意味合いで、やはり、一つの「明るさ」であろうと思う。

増田は「明るい子どもたち」を2部に分けた理由を以上のように述べているが、作文の中の子どもの「明るさ」を「文学的」で「童心至上主義的」な「ほほえましさ」と捉える一方、戦後の民主主義教育の元で育つ子どもたちの「新しさ」「意欲性」「行動性」「抗議・批判」などを生活を創造発展させる「勇敢なたちむかい」であり一つの「明るさ」として認めている。2部形式に敢えてしたことで、その2つの「明るさ」の異質性を強調したかったのであろう。増田はともかく子どもの持つ本然の「明るさ」が好きなのであった。

この作文集の冒頭には、『野火』発行以前の作品である「あたまかり」が載っている。『明るい子どもたち』には増田が戦前1928(昭和3)年から1936(昭和11)年頃までに指導した作文や吉田三郎の指導した作文などを随所に配置しているが、この「あたまかり」は栗原かねが指導した1933(昭和8)年の作であり『大形文集』に載ったものである。増田は気に入った作文は専用のノートの書き写すことにしていたが、この「あたまかり」を何度も視写しているという。

増田は後の1979(昭和54)年に崙書房より『鬼怒川のほとり』という児童綴り方作品集を編集出版するが、そこでもこの「あたまかり」を掲載している。増田は『S A I D E』No.38の「よい文の見分け方」の中でも、この作品を「かけ値なしの名文であり名作である」と述べ、千葉春雄の出した月刊誌『現代日本文学』の中でもこの「あたまかり」が「子どもの小説である」と高い評価を受けたことを紹介している。

また、この「あたまかり」は1952(昭和27)年に金子書房から発行された百田宗治の『綴り方の中の子ども』の中にも掲載されている。この『綴り方の中の子ども』は、百田が『工程』『綴り方教室』『教室』などに掲載された作品や各地の文集から特徴のあるものを抜き出し、解説を加えながら綴り方教育に対する持論を展開したものであるが、その「方言と子ども」の項に引用されている。生活綴り方は方言で書かれなければならないかという問題に百田は「単純に善し悪しは決められない」と述べているが、その事例として、「あたまかり」が使われたのである。

確かにこの「あたまかり」は地の部分は標準語であるが、会話の部分は常総地方の方言で綴られている。

そのために『明るい子どもたち』では、分かりにくい方言は標準語の注釈が付記されているのである。内容は母親にバリカンで頭を刈られる子どもの様子が軽妙な母と子の「会話」を通してユーモラスに描写されているのである。ラストの近所のおばさんの会話もほほえましいほど絶妙であり千葉春雄が「子どもの小説」と評したのも頷けるのである。方言で書かれた巧みな「会話」の流れと地の部分の最小限の説明など一体となって厚みのある文章になっている。

増田は『明るい子どもたち』の編集に際しては「文学的においしいもの」も意識的に載せている。「あとがき」で「書くことをとおしての文学教育ということは、新しく見直され、検討されていい問題ではないかと思っている。この集は、一つの文学読本として利用して頂くこともできると思う」と結んでいる。『明るい子どもたち』には文学読本的側面もあり、創作による文学教育の在り方を提示しているといってもよい。

3 『野火』の終焉とその意味

『明るい子どもたち』の出版記念会で増田は何を語ったのであろうか。その時の写真を見ると多少の満足感を得て静かに話す増田と、それを一心に聞いている周りの様子が伺える。増田はこの『明るい子どもたち』を知人等に贈呈しているが、増田の元に次のような返信が届いている。『鬼畔堂だより』No.13(1998.10)「(四)書信一束」より引用したい。

「明るい子どもたち」を今いただきました。まことにありがとうございました。厚くお礼申し上げます。さっそく拝見します。きょうはお礼のみかきました。 古谷綱武（東京・評論家）⁸⁾

「明るい子どもたち」をお恵送いただきありがとうございました。十月十九日上田庄三郎さんの一周忌で来栖良夫さんと会い、お名前を出して御元気の御様子おうわさしたところでしたので、一入おなつかしく存じます。こちらはあいかわらず雑用に追われて落ちつきませんが、まあこれも仕方ない宿命と思っています。

いつかPTAの会でもうかがえる機会つくっていただければ雑用なげうってとんでいきます。御健康を祈ります。 十一月十三日 宮原誠一（東大教授）⁹⁾

「明るい子どもたち」ご恵贈いただき深謝申し上げます。みんな生きいきとした作品で全体の水準の高さが思われます。目下編集中の「つづり方作品全集」（日記感想集）（東京創元社）に一編採らしていただきたくお願い申し上げます。ありがとうございました。 滑川道夫（児童文学者）¹⁰⁾

旧年中は貴重な文集御恵与に預かり深謝申し上げます。 塚本勝義（茨城大学教授）¹¹⁾

『明るい子どもたち』は、これらの知人から概ね好評を得ている。しかし、増田はサンデー毎日編集部に『明るい子どもたち』を寄贈し、雑誌に新刊本として紹介された文に「なぜ私たちはこのような本を読まされなければならないのだろう」という一節を見つけ愕然とする。増田は『鬼怒川のほとり』第一集（1979）のあとがきで「私は大へん残念がったり、くやしがったり、がっかりした記憶がある。（略）それ以来、私

の教育人生の仕事の上の結着は、こどもたちが精魂こめて書いたものを自分なりにまとめて、後世の人達に、児童文化遺産として残すことだという信念がぐらついた事は確かである。」¹²⁾とまで述べている。

1951（昭和26）年に無着成恭の『やまびこ学校』が世に出、生活綴り方のブーム的な復興と、その後の昭和30年代前半までの生活綴り方と作文教育論争による綴り方教育批判の高まりといった綴り方教育に対する環境は変化に富んでいた。時代の風潮は生活綴り方教育から国語科としての作文教育への変遷していたのである。

かくて『明るい子どもたち』が発行されると、翌年1956（昭和31）年12月に『野火』は終刊を迎えるのである。増田自身が言うように『明るい子どもたち』は、常総地方の綴り方教育の、ある意味で「記念碑」となったのである。

今後は地域文集『野火』について、その価値の検証を深めるとともに残存する『野火』の収集・保存を進めていきたい。

註・参考文献

1) 増田実の略歴は次のようである。

増田は1906（明治39）年茨城県結城郡三妻村三坂（現・水海道市）に生まれ、1925（大正14）年茨城師範を卒業。五箇小訓導を皮切りに、大形小、宗道小の訓導として国語教育、特に綴り方教育のリーダーとして活躍した。戦後1946（昭和21）年に飯沼小、大生小教頭、菅原小校長、豊田小・中校長などを歴任した。1965（昭和40）年に退職するまで増田は戦後も生活綴り方運動の先駆けになる雑誌『野火』の創刊（1947年）や「茨城作文の会」の初代会長（1953年）に就任するなど綴り方教育・作文教育への一層の意欲を燃やした。1961（昭和36）年に創刊された同人誌『S A I D E』は、地方の同人誌ではあったが、実践を通して教育を語るという実践的研究の貴重な教育記録である。

増田は県西地域における民間の教育運動を綴り方・作文指導の面でリーダーの一人であり、同人誌『S A I D E』などによって教育の実践的研究を推し進めた功績は大きいですが、平成13年5月に惜しまれながら逝去された。

2) 増田実編『S A I D E』No.35（1979.12）

※『S A I D E』は県西地域の教師の同人誌である。「サイド」と読み、布を裁断した際の裁ち屑という意味から、日常の学校教育における些細な事象一般を指している。日常の些細な出来事を大切にするという意味合いがある。

3) 増田実編『野火』（1947）新々堂

※現在稀少な資料となっている。

4) 増田実（1959）『明るい子どもたち』新々堂 p.246

5) 同上書 p.246

6) 同上書 p.247

7) 同上書 pp.247-248

8) 増田実（1998）『鬼畔堂だより』No.13 p.132

- 9) 同上書 pp.132-133
- 10) 同上書 p.133
- 11) 同上書 p.133
- 12) 増田実 (1979) 『鬼怒川のほとり』 第一集 崙書房 p.151